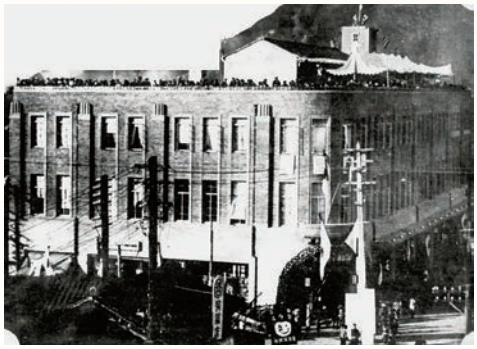
# テーマ25 金融恐慌・世界恐慌そして戦争へ

## 昭和のシンボル「福ビル」

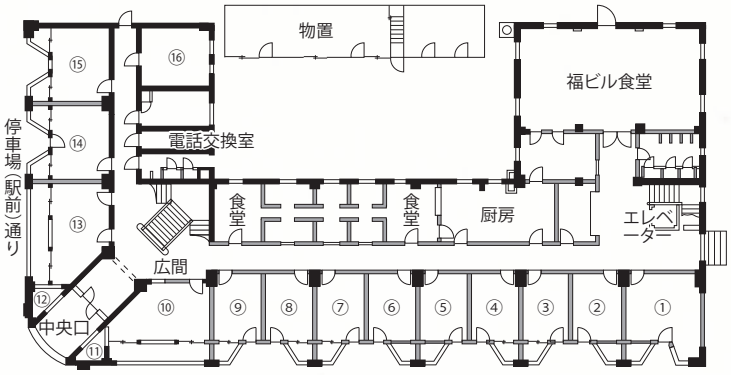


169.福島ビルヂング開業当時

1927(昭和2)年11月3日現在のまちなか広場に、福ビル(福島ビルヂング)[注]が開店しました。県都福島の新名所で「福島の流行は福ビルから」と言われ、連日多くの人で賑わいました。

福島市は、土地は市立図書館との交換で確保しましたが、厳しい財政状況のため、銀行団の資金提供を受けた草野喜右衛門他6名の有力者で建設し、市が年次計画で買収することにしました。

建物には、市立図書館、福島県商品陳列所、福島商業会議所、福ビル食堂や多くの商店が入居し、その後福島市商品館が開店しましたが、不況が続く中、1939(昭和14)年には議会で福ビルを速やかに売却すべしとの議案が議決されました。




170.福島ビルヂング開業当時の一階店舗

福ビル開店当時1階にはこんなお店があった。

①呉服太物雑貨　中村合名会社売店
②眼鏡専門　角長商店売店
③新刊書籍　博向堂売店
④小松モスリン店
⑤帽子とメリアス類用品雑貨各種　五番館サモト
⑥純日本菓子・西洋生菓子　松月
⑦万年筆専門　鈴木萬正堂
⑧高級文具類・書画骨董・唐木細工　三浦商店
⑨小間物・化粧品・玩具・タバコ　福屋小間物店
⑩生花花道具一式　花金
⑪薮内自転車商会　福ビル陳列
⑫二階商品列所即売　山田靴店　福ビル陳列
⑬美髪　カワムラ
⑭菓子と喫茶パン類とケーク　森永　共栄キャンデーストーア
⑮菱沼モスリン店(菱沼万四郎)
⑯歯科一般口腔外科　福ビル歯科　東北佐藤電気商会　陳列所(三菱電機株式会社特約代理店)

(1927(昭和2)年11月3日福島民報「祝福ビル開館広告」より)

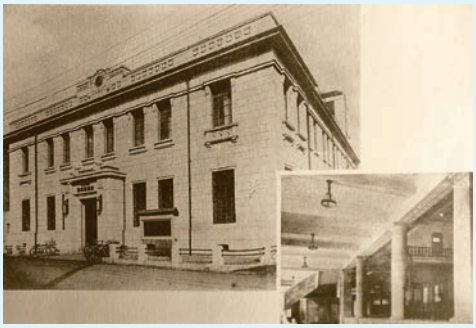
福ビル完成の昭和2年は、多くの銀行が休業・倒産した金融恐慌の年であり、市内でも福島商業銀行が休業し、その後4つの地元銀行が休業あるいは破産・解散に追い込まれました。

1929(昭和4)年には世界恐慌が始まり、市民生活も苦しくなりました。特に米と繭の価格暴落は、信達地方の農家に大打撃を与え、冷害によりさらに生活が苦しくなり、高い失業率から出稼ぎ、移民等が増加しました。

### コラム 福島市の金融恐慌

福島市では、1927(昭和2)年6月の福島商業銀行休業にはじまり(1929(昭和4)年3月破産)、翌年3月には福島銀行が預金支払制限(昭和4年2月破産)、12月には県下最大の銀行第百七銀行が休業となり、1934(昭和9)年6月解散となりました。福島貯蓄銀行も第百七銀行と同時に休業しますが、1930(昭和5)年再開しました。

金融恐慌の結果、1935(昭和10)年には福島市に本店を有する普通銀行は一つもなくなってしまいました。



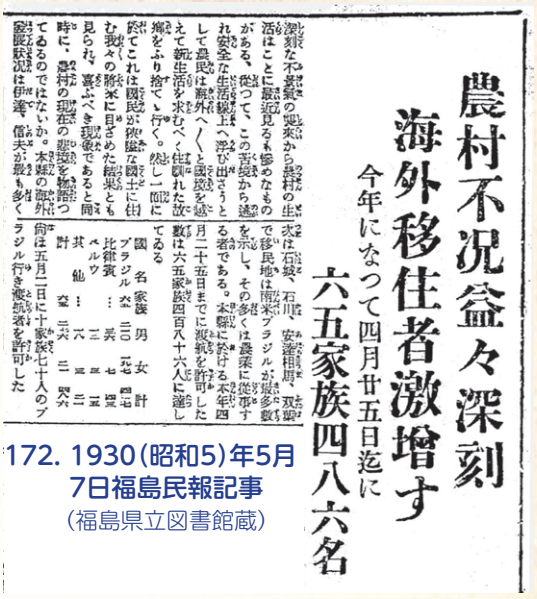
171.第百七銀行本店(『第百七銀行史』より)

注　当時は、「福島ビルヂング」もしくは「福島ビルディング」と呼ばれていた。本書では『福島市誌』(昭和17年刊行)に準拠し「福島ビルヂング」を採用。

## 不況の中で

不況そして凶作によって苦しむ農家の若い女性の就職は特に厳しく、出稼ぎや身売り等が増加し、警察も防止に乗り出すほどでした。

また、明治から苦しい農村生活から海外移民が多く見られましたが、深刻な不況の中で北海道移住や樺太への移民申込みが増加しました。


農村不況益々深刻
海外移住者激増す
今年になつて四月廿五日迄に
六五家族四八六名

172. 1930(昭和5)年5月7日福島民報記事
(福島県立図書館蔵)

さらに、家族・単身でのブラジル、カナダ、メキシコ、フィリピンへの海外移民も多くなりました。1930(昭和5)年、その年の4月25日までの本県海外移民は、伊達郡、信夫郡(現福島市)が最も多いと地元新聞は報じています。

さらに、1931(昭和6)年の満州事変により、満州への移民が国の政策として実施されるようになりました。その後、国際連盟脱退、1937(昭和12)年からの日中戦争へと戦争の道を進んでいきます。

| 学校 | 学年 | 勤労事項 | | | 勤労事情 | | 補導上・注意 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 仕事(勤務) | 時刻 | 所得 | 家庭状況 | 勤労目的 | |
| 第二 | 尋5 | 納豆売 | 朝晩 | 平均1日7銭月2円 | 貧困多家族 | 家計ヲ助ク | |
| | 〃5 | 〃 | 朝 | 平均1日5銭月1円50銭 | 準貧困〃 | 〃 | |
| | 〃6 | 〃 | 〃 | 月90銭 | 貧困子供多く父死亡 | 〃 | |
| | 〃4 | 〃 | 朝晩 | 1日4銭位 | 貧困父一人子一人 | 学用品 | |
| | 〃6 | 新聞配達 | 朝晩 | 月収5円 | 生活困難 | 家計ヲ助ク | 職業ズレセヌヤウ |
| | 〃4 | 〃 | 〃 | 月収3円 | 〃 | 貯金学用品 | |
| | 〃3 | 牛乳配達 | 夕方時々 | | 牛乳販売業 | 家事手伝 | |
| | 〃5 | 泥鰌売 | 夏日曜休日 | 20銭位 | 貧困 | 家計ヲ助ク | |
| | 〃5 | まんぢゅう売り | 日曜放課後 | 不定 | 準貧困 | 母の手伝 | |

**表 1934(昭和9)年7月校外における児童生徒の勤労調査**
市内の児童生徒の校外活動は貧困が原因となり、多くの学校で納豆売り等の勤労が見られる。凶作と恐慌が家庭に及んでいることがわかる。(『昭和9年7月福島小中学校校外指導連盟細則二関スル記録』より第二尋常小学校分のみ掲載)

### コラム 荒井村の外国渡航記念燈(荒井字八幡内)

昭和恐慌以前から、凶作で苦しい生活の中で、多くの海外移民がいました。特に多かったのが荒井村です。明治30年代前半から一番多いハワイ島のほか、英領カナダ、南米ペルー、ブラジルへと渡りました。1917(大正6)年3月、海外に渡った方々の寄付により「外国渡航記念燈」が建立されました。記念燈には荒井村をはじめ信夫郡の村々から海外に渡り、苦労を共にした方々の名が刻まれています。

173.「外国渡航記念燈」の文字板

174. 外国渡航記念燈

# テーマ26 戦後の生活と高度経済成長

## 広域都市福島市の誕生

1946(昭和21)年8月17日夜、稲荷公園広場(現福島市中央駐車場)で開かれた「大福島建設期成市民大会」で近隣9か村(渡利村、杉妻村、吉井田村、大森村、平田村、野田村、清水村、鎌田村、岡山村)の合併を軸とする決議がされました。決議内容は、釘本衛雄市長の「大福島建設計画」構想プランに基づくもので、翌1947(昭和22)年に、渡利村、杉妻村、岡山村、瀬上町、鎌田村、清水村、吉井田村の一部との合併が実現しました。

**175.市域のうつりかわり**
(1969(昭和44)年度版『市勢要覧』より)

1953(昭和28)年9月に町村合併を奨励する「町村合併促進法」が制定され、「昭和の大合併」が推進されました。福島市でも近隣の村々との合併が進みました。また、1955(昭和30)年には新たに飯坂町、信夫村、松川町、1956(昭和31)年には吾妻村が誕生しました。1962(昭和37)年には吾妻村は吾妻町となりました。

そして、高度経済成長期に、飯坂町(昭和39年)、信夫村・松川町(昭和41年)、吾妻町(昭和43年)と合併し、広域都市福島市が誕生しました。吾妻町との合併によって古代からの「信夫郡」の名称はなくなりました

### コラム 平和通り物語

1945(昭和20)年7月本土決戦・空襲に備え強制的に建物疎開が行われた空地のうち、栄町から舟場町にかけての一帯について、福島市は同年10月に街路計画を決め、工事に着手しました。幅40mとなる道路には、市の中央大通りとする案や、路面電車を複線化したいといった案も出たそうです。通りの名称については、「広小路」、「福島銀座」の名も挙がったそうですが、大町町内有志の「平和十日会」が「平和通り」の名乗りをあげ、通りに20枚ほどの「平和通り」表示板を建てる運動を行い、市側と協議し「平和通り」が公認されたと言われています。

**176.1957(昭和32)年当時の平和通り**

1956(昭和31)年には、中央分離帯がグリーンベルトとして活用され、太田良平作の平和のシンボル「乙女の像」(後に市児童公園に移設)が設置され、復興の名にふさわしい通りとなりました。

## 暮らしと高度経済成長

177.昭和50年頃の福島駅前

178.東北新幹線開通
1982(昭和57)年6月大宮～盛岡間が開通。
開通を祝う福島駅西口のようす。

戦後は衣食住全てが不足した生活から始まりましたが、昭和30年代後半からの高度経済成長により市民の生活も大きく変わりました。

さらに、昭和40年代はモータリゼーション時代と言われる高速交通時代を迎え、交通渋滞や公害問題などがおこり、渋滞をなくすための対策や道路網の整備が大きな課題となってきました。1967(昭和42)年に国道4号北町バイパスが開通、1970(昭和45)年に国道13号信夫山トンネルが開通、1973(昭和48)年にあづま陸橋が開通しました。

福島市と周辺町村を結んでいた路面電車(チンチン電車)は、自動車の増加に伴い路面電車の渋滞や事故が多く発生するようになり、1971(昭和46)年4月12日廃止となりました。

昭和40年代後半には、中合デパートを始め大型商店の福島駅前への集中化がみられる中、福ビル(昭和47年解体)をはじめ、多くの大正～昭和初期の福島市の顔が消えていきました。

昭和50年代になると、1975(昭和50)年4月東北縦貫自動車道(郡山～白石間)開通、1982(昭和57)年6月東北新幹線(大宮～盛岡間)開通と、福島市にも本格的な高速交通時代が到来しました。また、国道のバイパスや幹線道路の整備に伴い、郊外に大型スーパーが次々と開店するようになり、市民生活も変化していきました。

### コラム 消えていった福島のまちの顔

昭和40年代後半から昭和50年代にかけて、福ビル(昭和2年竣工、昭和47年解体)、第一勧業銀行福島支店(旧福島県農工銀行、大正2年竣工、昭和48年解体)、富士銀行福島支店(旧安田銀行福島支店、大正15年竣工、昭和49年解体)、そして日本銀行福島支店(大正2年竣工、昭和53年解体)など、大正～昭和初期の福島市の歴史を語る上で欠くことができない建物が消えていきました。

179.(右上)日本銀行福島支店
180.(右下)第一勧業銀行福島支店
(福島県農工銀行時代の写真)
181.(左)富士銀行福島支店
(安田銀行時代の写真)

# テーマ27 現代の福島市

## 市制施行100周年と飯野町との合併

1998(平成10)年以降になると、保健福祉センター(平成10年)、すりかみ浄水場(2003(平成15)年)、子どもの夢を育む施設「こむこむ」(2005(平成17)年)等、子どもから高齢者まで安全・安心で健康で生き生きと暮らせる施設づくりが進められてきました。

2007(平成19)年に福島市となって100歳を迎えましたが、同時に新たな福島市の誕生の年ともなりました。6月に飯野町との合併協定の調印式が行われ、翌年7月1日に合併し、人口29万4773人、面積767.74㎢となりました。

### コラム 東日本大震災・原子力発電所事故の記憶

2011(平成23)年3月11日(金)14時46分震度6弱(三陸沖の深さ20㎞、マグニチュード9.0)の東北地方太平洋沖地震が発生し、東北地方から関東地方北部の太平洋沿岸を中心に広範囲で大津波を観測し、多くの死者、行方不明者と共に建物全壊など甚大な被害がありました。

福島市では、地震により電気・ガス・水道などのライフラインに大きな被害が発生し、死亡者13名(内、震災関連死7名)、住宅等の被害は1万件を超え、市施設の被害は約300件となりました。さらに、大津波により12日午後3時36分に東京電力福島第一原子力発電所1号機で水素爆発、14日3号機水素爆発、15日4号機水素爆発が発生し、多量の放射性物質を放出させる国内最大の原子力発電所事故が起こりました。原発事故によって放射性物質が広範囲に飛散し、平常値を大幅に上回る環境放射線量となりました。

(福島市災害対策本部・復興推進本部『東日本大震災の記録』2014年より)

## 東日本大震災・原子力災害からの復興とまちづくり

新福島市の第一歩を踏み出した矢先、2011(平成23)年3月11日の東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故により、ふるさと福島市はかつて経験したことのない被害を受けました。ライフラインや建造物が甚大な被害を受け、さらに、未経験の原発事故は、私たちの日常生活そのものに未曽有の災害をもたらし、平常値を大幅に上回る環境放射線量による健康への影響が最も懸念されました。さらに農産物をはじめとする産業・経済分野の被害、そして風評被害などあらゆる分野にその影響は及んでいます。

福島市では、ふるさと福島市の未来をになう子どもたち、そして全市民が夢と希望を持てる「希望ある復興」を理念とする復興計画を作成し、特に除染を柱とした原子力災害からの復興を、市民のみなさんと一緒に進めています。

復興と共に、新たなまちづくりも進められています。福島の

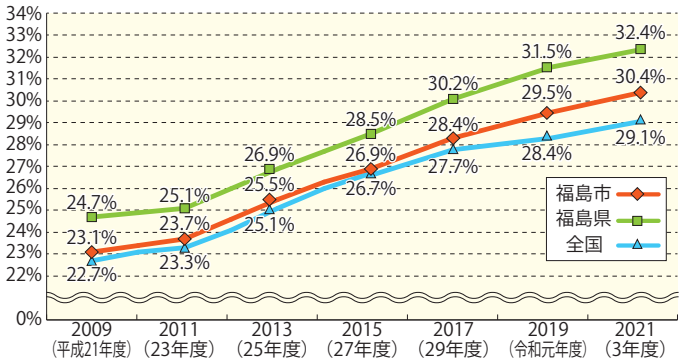
**182.暁参りの子どもわらじ**
伝統の中で新たな取り組みが行われている。

玄関口であるJR福島駅前通りについて、リニューアル整備事業が進められています。そして、東日本大震災により大きな被害を受け解体した水道局分庁舎の跡地に、大原綜合病院が建設され、栄町には福島県立医科大学の保健科学部が設置されました。これらの事業によって中心市街地もその姿を大きく変え、新たな時代を迎えることになるでしょう。

## 人口減少・高齢化社会への対応

「人口減少時代」到来と言われる中、福島市の人口は2001(平成13)年をピークに穏やかな減少傾向となり、さらに出生率の低下と共に今後急激な人口減少が予測され、2040年には約22万6000人と推計されているデータもあります。また、本市でも少子高齢化が進み、65歳以上の高齢者が占める割合(高齢化率)は、2021(令和3)年度では30.4%であり、全国の高齢化率を上回っています。

福島市にとって、希望ある復興と共に、急激な人口減少と、高齢化社会に対応した対策が今求められています。先人達が永々とふるさとを築いてきた知恵に学び、安心して働き、安心して子育てができ、安心して住み続けられるふるさとづくりを目指す取り組みが重要になってきます。



183.福島市の高齢化率の推移

### コラム 東京オリンピックと古関裕而

184.古関裕而
(1909～1989)

2021年二回目の東京オリンピックが開催されました。一回目は半世紀前の1964(昭和39)年に戦後復興を世界に発信したオリンピックでした。アジア初のオリンピックで、開会式の選手入場の初めに演奏されたのが、古関裕而作曲の名曲「オリンピック・マーチ」で、「心も浮きたつような古関裕而作曲」と紹介され、人々に深い感動を与え、音楽のもつ力を教えてくれました。

若い人の祭典・日本での開催をイメージし、一世一代の作として精魂込めて作曲したと古関は語っています。

2021年の東京オリンピックは、東日本大震災からの復興を目的の一つに掲げられました。古関裕而が戦後の「復興」を背景に若い世代に発信した「オリンピック・マーチ」の心は、ふるさとの復興、そして将来を担う若い世代たち、半世紀の時を超えて開催された東京オリンピックへと引き継がれました。

185.信夫山から中心市街地を望む

トピック 9

# 福島市とくだもの

## サクランボとリンゴの栽培

福島市では、明治の初めにサクランボの栽培が始まり、1940(昭和15)年頃までは、福島市の北部、瀬上から飯坂付近を中心に広く栽培されていました。

福島市でのリンゴの栽培は、1888(明治21)年頃から始まりましたが、初めの頃は成功しませんでした。しかし、1907(明治40)年に水田の中に土を盛って塚のようにし、そこにリンゴを植え付ける栽培方法を取り入れたことをきっかけに広がり、現在では福島盆地で広くリンゴが栽培されています。

186.明治30年代の桑畑の様子(山口地区)

第一次世界大戦以前は多くの農家が、養蚕業を副業としていました。しかし、1914(大正3)年に戦争が起こると生糸の値段が下がり、桑の木の間にサクランボやリンゴの木を植えたり、さらに桑からサクランボやリンゴへの植替えが進みました。

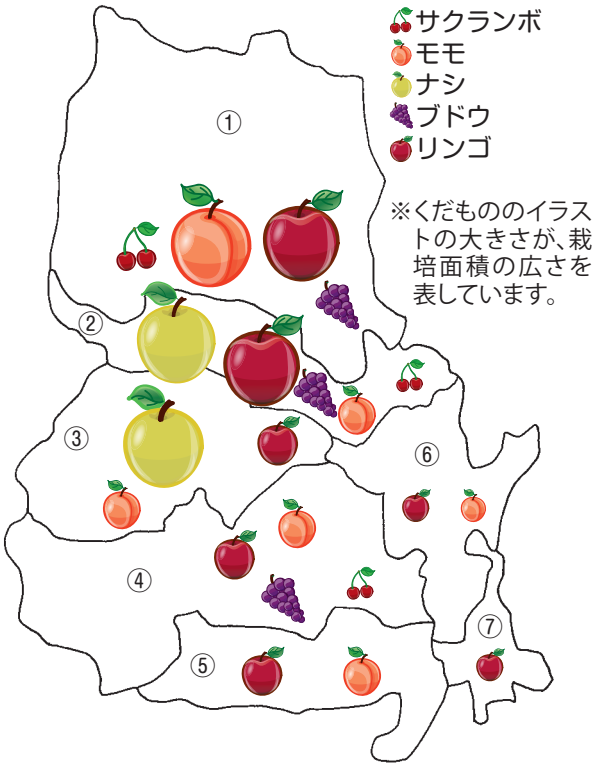
### コラム 福島市の農産物の特色

福島市は周囲を山に囲まれており、その影響から夏は蒸し暑く、冬は寒さが厳しい気候で、一年に降る雨の量は多くありません。

その果樹栽培に恵まれた風土を活かし、初夏のサクランボ、真夏のモモ、秋のナシやブドウ、初冬のリンゴなど、四季折々のくだものを楽しむことができます。

また、農産物の生産には、方部ごとに次のような特色があります。

| | |
|---|---|
| ①飯坂方部 | モモとリンゴを中心とした果樹単一経営 |
| ②北福島方部 | 果樹と水稲を中心とした経営 |
| ③吾妻方部 | ナシを中心とした果樹に水稲、花き、花木を組合せた複合経営 |
| ④西信方部 | 水稲に果樹を組合せた複合経営と花き、花木を中心とした経営 |
| ⑤松川方部 | 水稲に果樹や野菜、花きを組合せた複合経営 |
| ⑥東部方部 | キュウリを基幹作物とした施設園芸 |
| ⑦飯野方部 | 野菜、畜産等を中心とした水稲との複合経営 |




187.福島市の果樹分布図
(作成協力：ふくしま未来農業協同組合)

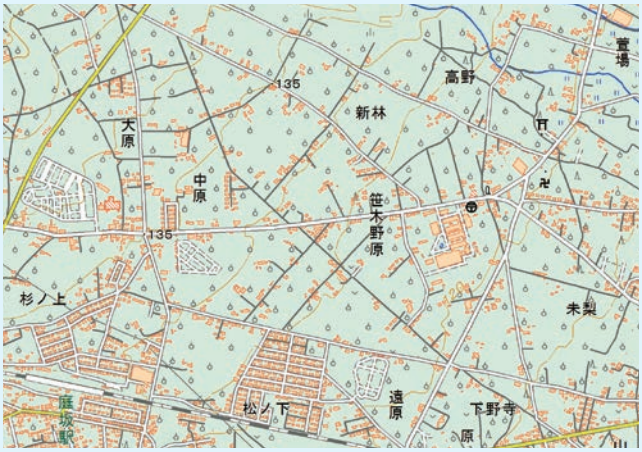
## コラム 鴫原佐蔵と萱場梨

福島市ではナシの栽培も盛んですが、その生みの親が、鴫原佐蔵です。鴫原佐蔵は、1838(天保9)年に笹木野村(笹木野)に生まれました。

笹木野原のような砂や小石の多い土地がナシの栽培に適していることを教えられた鴫原佐蔵は、苗木50本を取り寄せて、1887(明治20)年に笹木野原の原端にナシを植え始めました。その頃は機械がなく、人の手で耕さなければならないため、山や野原を畑にすることは相当な苦労を伴うものでした。また、苗木を植えてもすぐに収穫はありませんでした。しかし、大変な努力の結果、数年後ついにナシの栽培に成功します。その後、ほかの村人も鴫原佐蔵の教えを受けてナシの栽培を始めました。

福島市にナシの栽培を広めた業績を称えて、1911(明治44)年にナシを栽培する農家の人たちが、笹木野原字新林に頌徳碑(徳をたたえる碑)を建てました。

188.1908(明治41)年の地形図




189.2016(平成28)年の地形図(作成:(一財)日本地図センター)

針葉樹林(Λ)や桑畑(Y)から、果樹園(O)になり、住宅も増えたことが読みとれます。

## コラム 佐藤三男と福島産モモの販路拡大

福島を代表するくだものの一つがモモですが、その販売先を広げることに力を尽くした人物が、佐藤三男です。佐藤三男は、1914(大正3)年に伊達郡湯野村(飯坂町湯野)に生まれました。

1948(昭和23)年に北海道石狩町で商売を始めた佐藤三男は、苦労と努力により業績を上げ、北海道を代表する水産会社をつくりあげました。北海道で商売を成功させながらも、故郷の福島に誇りと愛着を持ち続けていました。

1974(昭和49)年に札幌福島県人会副会長に就任した頃、札幌で福島のくだものまつりが開催され、これをきっかけに福島のモモの販路拡大に乗り出します。福島産くだもののＰＲに訪れるミスピーチキャンペーンクルーなどの宿泊に22年間にわたり会社の寮を提供したほか、デパートなどでの販売に力を入れました。その結果、北海道における福島県産モモのシェアは、70%を占めるまでになりました。

1996(平成8)年5月4日には、福島県くだもの消費拡大委員会委員長(福島市長)名の感謝状が贈られました。

## コラム ミスピーチキャンペーンクルー

モモを中心にナシやリンゴなどの福島産くだもののイメージアップを図るため、全国各地のイベントや量販店などでＰＲ活動をおこなっています。

1963(昭和38)年の初代桃娘から続いています。

190.福島市公設地方卸売市場のセリ台でPR活動をするミスピーチキャンペーンクルー
(提供：福島県くだもの消費拡大委員会)

## 福島市史編纂委員会（平成29年3月発行時）

委 員 長　鈴木　　啓（福島県考古学会顧問）
副委員長　伊藤　喜良（福島大学名誉教授）
委　　員　太田　隆夫（福島県史学会常任理事）
委　　員　吉村　仁作（福島大学名誉教授）
委　　員　村川　友彦（福島県史学会会長）

## ふくしま歴史絵巻執筆者（順不同）

齋藤　義弘　　梅津　　司　　小針　道理　　柴田　俊彰　　守谷　早苗

## ふくしま歴史絵巻事務局（令和7年7月一部改訂時）

星　　秀明　　髙橋　佳生　　加藤　芳宏　　丹野　隆明　　丹治麻里子
菅野真澄美　　笠井　武弘


# ふくしま歴史絵巻

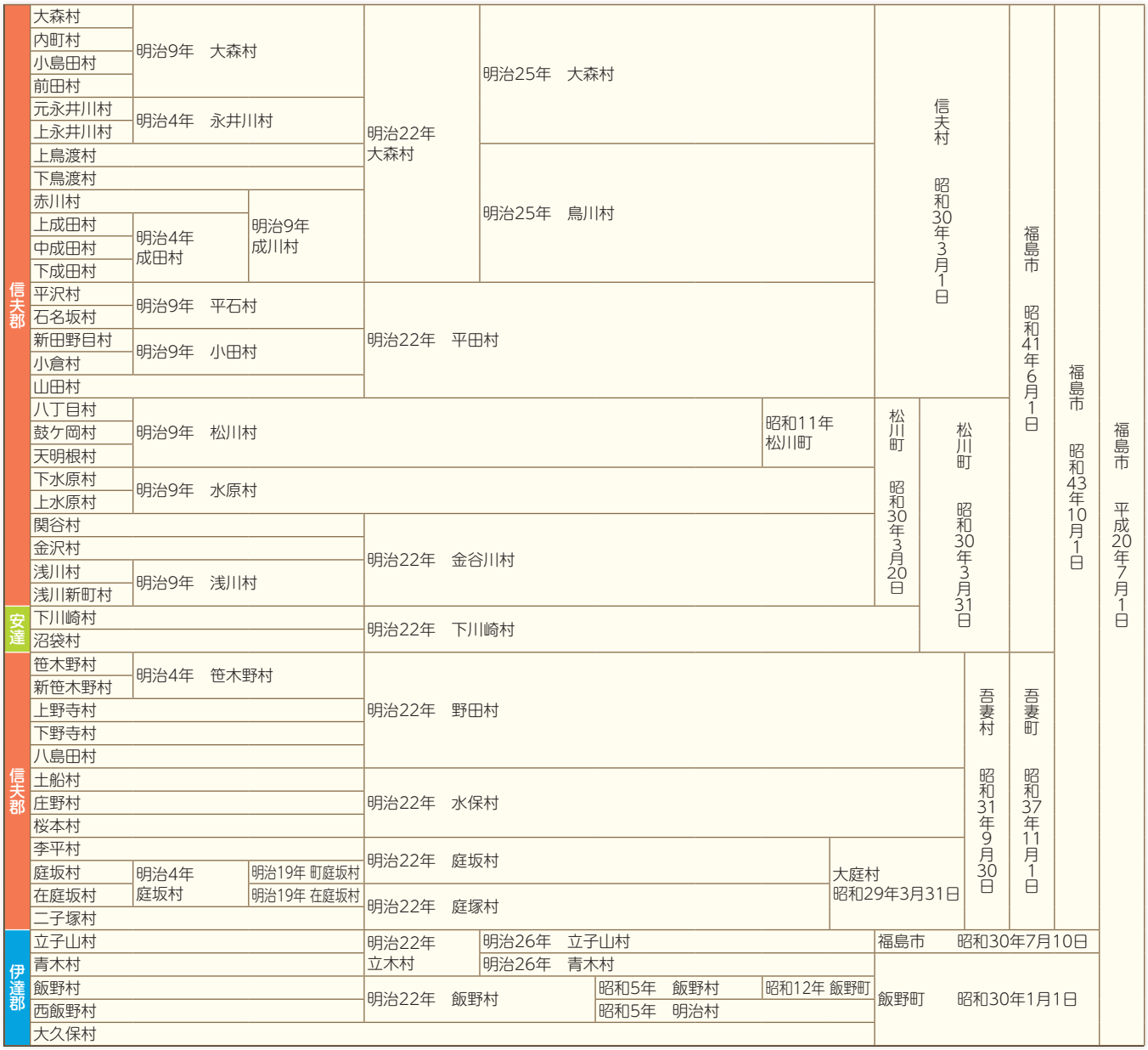
平成29年3月発行
平成30年3月一部改訂
令和５年6月一部改訂
令和７年7月一部改訂

編　集　文化振興課　郷土史料室
発　行　福島市
印　刷　株式会社　山川印刷所

〒960-8601 福島市五老内町3-1　福島市役所

# 福島市の成り立ち（町村合併表）

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 信夫郡 | 福島村 | 明治4年　福島町 | 明治22年 福島町 | 明治37年 福島町 | 明治40年 福島市 | 福島市　昭和22年2月1日 | 福島市　昭和22年3月10日 | 福島市　昭和29年3月31日 | 福島市　昭和30年3月31日 | 福島市　昭和31年9月 | 福島市　昭和39年1月 | 福島市　昭和41年6月1日 | 福島市　昭和43年10月1日 | 福島市　平成20年7月1日 |
| 信夫郡 | 曽根田村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 腰浜村 | | 明治22年 浜辺村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 五十辺村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 小山荒井村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 渡利村 | | 明治22年　渡利村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 小倉寺村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 大蔵寺村 | 明治10年　黒岩村 | 明治22年　杉妻村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 黒岩村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 伏拝村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 鳥谷野村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 大平寺村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 郷ノ目村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 清水町村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 田沢村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 岡本村 | 明治9年　岡島村 | 明治22年　岡山村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 中島村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 岡部村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 山口村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 御山村 | | 明治22年　清水村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 森合村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 北沢又村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 南沢又村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 泉村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 鎌田村 | | 明治22年　鎌田村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 丸子村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 本内村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 瀬ノ上村 | | | 明治35年　瀬上町 | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 南矢野目村 | | 明治22年　余目村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 北矢野目村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 宮代村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 下飯坂村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 沖中野村 | 明治9年　沖高村 | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 高梨子村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 上大笹生村 | 明治9年　大笹生村 | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 町大笹生村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 下大笹生村 | 明治9年　笹谷村 | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 大谷地村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 荒井村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 土湯村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 仁井田村 | | 明治22年　吉井田村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 吉田村 | 明治9年　吉倉村 | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 下名倉村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 方木田村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 八木田村 | | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 大波村 | | 明治22年　小国村 | | | | | | 霊山町 昭和30年 | | | | | |
| 伊達郡 | 新下小国村 | 明治10年　下小国村 | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 古下小国村 | | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 上小国村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 佐原村 | | 明治22年　佐倉村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 下村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 上名倉村上組 | 明治3年　上名倉村 | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 上名倉村下組 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 上飯坂村 | | 明治22年　飯坂町 | | | | | | 飯坂町　昭和30年3月31日 | | | | | |
| 信夫郡 | 中野村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 上入江野村 | 明治4年　入江野村 | 明治22年　平野村 | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 下入江野村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 佐場野村 | 明治9年　井佐野村 | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 井野目村 | | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 平田村 | 明治9年　平塚村 | | | | | | | | | | | | |
| 信夫郡 | 飯塚村 | | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 湯野村 | 明治9年　湯野村 | 明治22年 湯野村 | 明治34年　湯野村 | 昭和15年　湯野町 | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 四箇村 | | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 北原村 | | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 増田村 | 明治9年　東湯野村 | | 明治34年　東湯野村 | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 塩ノ目村 | | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 板谷内村 | | | | | | | | | | | | | |
| 伊達郡 | 茂庭村 | | | | | | | | | | | | | |




凡　　例

1 村名は、『旧高旧領取調帳』により、1868(明治元)年現在のものです。

2 昭和20年以降の福島市域での合併は月日も記載しました。